

登校拒否児童の教育相談

桑山豊一*

I はじめに

今春4月、現任校に着任してはじめて教室に入ったとき、うしろの席でかなり大柄で一見してあきらかに肥満児と思われる男児が、じっとうつろなまなざしで私を見つめているのが目に止まった。これが彼とのはじめての出会いであった。彼が大柄で目立つような肥満児でなかったら、うっかり見過してしまいそうな活気のない存在であった。

しかし、その数日後、ささいなことから友だちとけんかをし、学級の男児のほとんどを敵にまわして半狂乱になってあばれ廻っている彼に接したときには、初対面の印象はすっかり押しのけられてしまっ、事態の重大さをひそかに感じさせられた。この日、職員朝礼で現場を離れたすきに家に逃げ帰ってしまった彼を説得に家庭訪問したとき、過去数年間にわたってかなりの登校拒否の事実のあったことをはじめて知らされた。

彼の人間性に対するより深い理解と適切な働きかけは、すぐにも当たらなければならない問題があった。新しい学級担任に対する違和感を取り除くためにも、教育相談の必要を強く感じ、学級や家庭への働きかけをも積極的に行なうことにした。

1回、2回と面接を重ねていくうちに、次第に彼の登校拒否の病根の深さを感じさせられるような新事実が次々に現れた。また教育相談と並行して学級内での友人関係の改善や民生委員の協力を得て、家庭への働きかけを行なった。

彼との出会いから半年が経過したが、事態は一進一退を繰返し、時には暗中模索し、時には暗礁に乗り上げたりして今日に至った。以下はその経過の記録と考察、それに伴う今後の方策についてである。

II 児童の概要

1. 対象児童 6年生 Y児(男) (6年生4月より9月まで)

2. 評価の記録と知能検査

(1) 学業成績 4年 全教科2 5年 全教科2 6年1学期 国語・図工1のほか全部2

(2) 知能検査 教研式学年別知能検査 知能偏差値40 知能指数84(昭和49年5月実施)

* 北魚沼郡広神村立下桑小学校

- 3 身体 の 状 況 身長 151.5cm 体重 62Kg (9月20日測定)
肥満体質・持久力が著しく劣る。食欲旺盛である。
- 4 出欠 の 状 況 3年 8日欠席(かぜによる。)
4年 29日欠席(かぜ・腹痛とされているが、事実は怠学によると見られる。)
5年 39日欠席(かぜ・腹痛とされているが、事実は近所の幼児と遊んでいた。)
6年 (9月30日現在) 6日欠席 (欠席のうち病欠は 1回)

5 Y児の実態

4年生になって、かぜ、腹痛と称して欠席が多くなる。欠席して家でぶらぶらしているが身体に異状があるようでもないようだった。

5年生になってますます欠席が目立つようになる。朝登校時に近所の児童が呼びに行くと便所に入って出て来ないので、呼びに行った児童が学校に行ってしまうと出て来て「学校に行かない。」と言うようなことがよくあるようになった。母親はそのたびに学校には「体の具合が悪いので欠席する」と連絡し、学校でもそのように処理していた。そして日中は平気で幼児と戸外で遊んでいるようになった。

6年生になって間もなく、学級の児童とけんかをして泣いて家に帰り、連れもどそうとした母親に石を投げつけてけがをさせた。

肥満体質で、ふとっているのをひどく気にし、他人の前ではだかになることをひどくいやがる。

食欲旺盛で、食べ物については自制心が全くない。

ふだんはおとなしいが、気にいらぬことがあると怪力を出してあばれ廻る。

学習、作業は気が進まないで全くやらない。ささいなことですぐ泣く。

友人の信頼がなく孤立した存在だったが、学級への働きかけの結果、最近ようやく遊び友だちができてきた。

野球・水泳を好んでするが、自分の不得意の運動については全く拒否的である。

金銭の浪費が目立つ。

6 家事の状況

父親(46才)は工員で、年中工事現場を転々としていて、以前は数か月に1回くらいしか帰宅していなかったが、最近では1か月に1~2回は帰宅するようになった。いたっておとなしいタイプの人で、帰宅すると、子どもたちをでき愛し、かなり高価な品物をも、子どもたちの言いなりになって買い与えている。

母親(39才)はあまり態度のはきはきしないタイプである。こちらから聞いたこと以外は話そうとしない。子どもたちに対してしかったり、意見をしたりする様子があまり見うけられない。子どもたちの言いなりになっている。家事に従事している。

本人は2人兄弟の長男

妹は小学校2年生、朝登校時によく泣いて学校に行きたがらないで、通学班の上級生の女の子を困らせることがよくある。学校ではあまり目立たない存在である。授業中居眠りをよくする。

7 学級の状況

男子25名、女子18名。入学以来担任が7回替わる。

男子は学力において女子に劣る。活動的であるが、全体のまとまりがなく、指導性のすぐれたリーダーがいない。

女子は男子の活動におされて活気がなく、全体に消極的である。

全体にまとまりがなく、授業中も騒然としていて落ち着きがない。指導に努め、ようやく落ち着きが見えて来た。

今春4月より学校統合により、児童数が男子8名、女子1名ふえた。

8 民生委員との面接から

当校で毎年実施している民生委員との定例面接で得られた情報によると、民生委員も、この家庭に対してかねがね気にかけていることがわかった。

父親は仕事の性質上かなりの高収入がある。父親も小学校時代には怠学の傾向が強かったと言うことである。

家庭教育の面では、父親の関心や影響力は薄く、子どもたちの世話は母親が当たっているが、母親も子どもたちの教育には関心を持って積極的に当たっている様子は感じられない。

9 本人の友人関係

学校での休けい時間や放課後、学級の児童とよく遊んでいる。遊びのグループへの働きかけは積極的であるが、遊びのうえでささいなことからよく争いを起こし、むきになることがよくある。こんなことから学級の児童からあまり好ましく思われていない。またふだんの行動から同級生の信頼は極めて薄く、特別視され敬遠されがちである。

Ⅲ 実践の経過と考察

1 指導の方針

父親不在の家庭でのしつけの欠陥と、母親の甘やかしと放任から困難に耐え乗り越えて行こうとする気力の欠如と、わがままな性格から来る自分本位の行動が、大きな要因と考えられる。また派生的要因として、友人間の人間関係の欠如も、考慮しなければならないだろう。これらの諸要因を取り除くためにカウンセリングを通じて本人に働きかけ、家庭への啓蒙とあわせて学級集団への働きかけによって、学級集団の人間関係の改善をはかることにした。

- ① 日常生活の中で集団への適応をはかる。
 - ② 相手の立場を考え、受容的なふんい気の学級づくりと仲間づくりをする。
 - ③ 母親に、子どもに対する関心を持たせ、問題行動に対して学校との連携を密接にするよう働きかける。
 - ④ Y児とのラポート関係をより一層深め、教育相談を実施しながら自己実現への援助をはかる。
- ①、②については道徳、生活指導を通じて働きかけると同時に、毎日の日課の中に意見交換の時間を設けて取り上げることにした。

2 問題行動とカウンセリング記録とその考察

(昭和49年4月5日)

朝、始業前遊びの上のささいなことから級友とけんかになり、組のほとんどの男の子を敵にまわしてあばれ廻り、泣いて家に帰ってしまう。なだめようとする友だちに石を投げつけて寄せつけず、学校へ連れもどそうとする母親にも石を投げつけてけがをさせた。

○ 訪問面接の記録 (事実上第1回の面接となる。) (Tは教師、CはY児)

玄関先での私の声を聞くと、二階へ上ってかくれてしまう。二階へ上って部屋に入ってもよいか尋ねるが返答がなかった。数分待って返事のないまま部屋の戸をあけて中に入る。

T 先生、君と話をしたいんだがいいかね。話をしたくなかったら帰るけど。……

C 沈黙<3分17秒>(窓側に立って目をすわらせてこちらをにらんでいる。先程のけわしい表情に比べてやや落ち着いた感じである。)

T 立っているとなんぎくなるからすわって話をしようよ。

C (ぐあい悪そうな表情ですわる。)

T どうしてけんかなんかしたのが聞かせてくれ

ない。

(沈黙2, 3秒)

C みんなが、おれごとへんなこと言った。

T どんなこと言ったか聞かせてくれない。

(沈黙1分10秒)

T 先生にも言いたくないことなんだね。

(沈黙33秒)

T みんながなかよくしてくれたら学校へ来れるかね。先生といっしょに学校に行かない。

C やだ。(不快の表情を示す。)

T 先生もう少し話したいんだけど、学校へ帰らなければならんから、放課後また来てもいいかね。

C (かすかにうなずく。)

この日、母親から、昨年ほこんなことがあると次の日から、頭が痛いだの腹が痛いだのと言って2日か3日は学校を休んでしまっていたと言うことを聞かされた。だんだん調べてみると病欠と称して休んでいた欠席のほとんどが今回と同じようなケースであり、はじめて問題の事実がわかる。学校へ帰って、学級の児童と話し合った結果、ほとんどの児童が彼に対してあまりよい感情を持っていないことがわかり、さっそく対策をたてることにした。

放課後、再び家庭訪問すると近所の年下の子どもたちと夢中になって遊んでいる彼が目にと止った。話をしようとしたが、遊びに夢中になって応じてくれないので明日の登校を約束して帰る。

(昭和49年4月10日)

その後、たびたび呼び出し面接を試みたが応じてくれなかった。仕方なく遊びの仲間に入ったり、二人で相撲をとったりした。その後、身体測定日に2回目の欠席をする。家庭へ連絡すると頭が痛いと言うので休ませたとのことだったが、児童の話では昨年も体重測定日にはきまって欠席していたと言うので、あき時間を利用して家庭訪問した。すると案じた通りこたつでねころんでテレビを見ていた。

○ 訪問面接の記録

母親がねころんでいる彼に手をかけて起こそうとすると、必死になってコタツのふとんの中にもぐってかくれようとした。ふとんをはぐろうとすると狂ったようになってそばにあったひもで母親の首をしめようとした。たまりかねて手を出すとそばにあった釣竿をふり廻して、あやうくたなかれそうになった。やむなく、しばらく世間話をして過し、落ち着きが見えてから話し合いに入る。

T 先生、君をつれに来たんじゃないんだよ。どうして休んだのかよく聞きたいと思って来たんだよ。

（沈黙22秒）

C みんなが体重測るとき、裸になると、おれこ

→ とえなこと言うのでやだ。

T うん、なるほど……。じゃ体重測定がなかったら学校に来れるんだね。

C うん。

T 君がはずかしくない、いい方法ないかね。

C みんなが見ていなかったらいい。

T みんなが見ていても、へんなこと言わなかったらいいの。

C みんな、えなこと言う。

T うーうん。

T じゃ、今日は先生と二人だけでやって、これからのことは、来月の体重測定までに考えることにしたら。

C うん。

この日は、さっそく私の車で気分よく登校し、約束どおり体重測定をすませた。しかしその後ちょっと目を離したすきに姿をくらませてしまい、学校中をくまなくさがし廻ったあげく、宿直室のテーブルの下にもぐってかくれている彼を見つけたが、給食時まではどうとう教室には入らなかった。この回は登校させるという目的意識からかれて、カウンセリングの本質を離れたのではないかと反省させられた。

3 その後の経過

<4月下旬>

4月半ばを過ぎてからは、だいぶ落ち着きを見せて来たようだが、授業中のさえない表情や、清掃や作業を怠けて友だちにきらわれている状態から、本質的な問題解決にはまだほど遠い感じがした。暇を見ては遊びの仲間に入ったり、雑談の仲間に入ったりしてそれとはなしに彼との接触の深まりを計っていた。

時折呼び出し面接を試みると、3度に1度は応じて来るようになった。しかし、話題はいつも家族のことや、遊びのことなどで、核心にふれるような話題は意識して避けようとするそぶりがうかがえた。

家庭訪問の際の母親の話によると、学校に行きたがらないような朝は、目覚めが悪く気げんがよくないと言うことである。母親はそのために、朝ふとんの中で寝ているY児の背中をさすってやったり、足をなでてやったりするのだと言うことだった。父親不在の家庭で、このような過度の甘やかしや保護は彼の問題行動を直すためには大変有害なことではないかと考えられるので、6年生にふさわしい自覚を起こさせるためにも、年令にふさわしい扱いをするよう母親に話した。

<6月9日>

運動会当日欠席する。母親は運動会参加のため来校しPTA種目に出場しているが、Y児の欠席については連絡なく、こちらから理由を尋ねると頭痛のため欠席したとのことだった。しかし、学級の児童の話では、毎年来るのがいやだと言って運動会の日には欠席していたとのことだった。運動会練習の際にいつもぶりになって走っていたY児の姿を思い出し、欠席の真の理由が思い当たるような気がした。運動会を前にして悩み多かった彼、そしてその悩みを察知出来なかった私、共々に今後に残した1日だった。

<8月10日>

夏休みの登校日欠席する。午後家庭訪問すると、朝学校に行くのがいやだと言ってだだをこね、あげくの果て暴れだして夏休み帳をスタスタに引き裂いてしまったとのことだった。少しの困難に対しても泣きわめき、暴れさえすれば、親にすべての要求を認めさせ、なんとかその場をごまかし通せるという非常に幼発的依存状態に自分を停滞させ、自己統制を欠き、自分の力で困難を解決しようとする気力の全くないY児の問題行動の深層が見られるような気がした。昨日まで元気で学校のプールに水泳練習に来て、水泳もだい分うまくなったと喜んでいただけだったので非常に残念だった。

<9月20日>

村内学童親善体育大会当日無断欠席する。運動会当日の件もあるので、前日、呼び出し面接を行ない、出席を固く約束していたのだが、電話で欠席の理由をたしかめると、母親の話では、前日遊んでいて頭に大きなコブを作り、そこが痛むということだった。翌々日、呼び出し面接を行ったところ、途中で泣き出し、面接を中止する。

Ⅳ 6か月の反省と今後の方針

Y児との出会いから早くも半年が過ぎた。この間に何回かの登校拒否があり、その都度訪問面接、呼び出し面接を繰返した。自主面接は遊びが忙しいせいかなかなか実現されなかったが、訪問面接、呼び出し面接のたびにY児は元気を出し明るい表情を取りもどした。問題行動から解決へのパターンは非常に容易すぎる感じがするのだが、忘れた頃にはまた問題行動を起こして来た。真の解決は登校拒否そのものではないに、その深層に根深く存在する怠惰、わがまま、気力の欠如を取り除いて行く以外に方法はないように思われる。

家族への働きかけも、本人への働きかけと共に実施して来た。母親に対しては、アドバイスから相談へと移行し、子どもの問題行動に対しての無関心から、関心が高まるにつれて、どうしていいかわからないという悩みの深まりが感じられる。

学級集団への働きかけは、徐々に効果が見られるようになった。最近学級内でのリーダー格のS児との間に親交が深まりつつある。学級への働きかけは、学級の児童をY児を救うための手段として利用するのではなく、この機会に学級全体の成長と、集団としての質の高まりを旨として行なって来た。4月の新学期のはじめに見られた、融和と協調・協力性が欠如し、まとまりのなかったこの学級が、Y児の成長と共に、仲よく協力し合える明るい学級となるように努めている。